

Eブックス①7

上手になる 上手になる

ナデシコ

radshiko

VOL.2

伊東久雄 著
株式会社日本フレインウェア
Function5出版部刊

目次

- その9 苦しみが有るから喜びが解る 2
- その10 今の姿で他者を判断するなかれ 3
- その11 自分らしさを通す 4
- その12 懲りない動物 6
- その13 正解なんて誰にも解らない 8
- その14 話を最後まで聞かぬは一生の悔い 9
- その15 しなくてもよい経験はしない方がよい 11



時々、法事でお寺に行きお経をあげていただきます。

ある日のこと、いつもは40分くらいかかるところ、住職の体調が良かったのか、サービスなのかは知らないが1時間近く上げていただきまして……。

その時足が…、もの凄く痛くて、痛くて。

そして、やっぱり、しびれて立てない。

それで不思議な事に何故かわからないんですけどね、自然にそこに居たみんなで笑っちゃったんです。

みんなも同様に足がしびれて立てないにもかかわらず。

で、そのときにはと思ったんです。

「苦しみの後には楽しみが来る」ってね。

陰陽思想にこうあります。

「陰極まれば、陽極まる」

つまり、「苦しみが大きければ大きいほど、その後の楽しみも大きい」ってことです！

苦しいときは、その後の楽しいこと……。

じっと待てば良いんです。



笑福亭鶴瓶が六代目笑福亭松鶴師匠に弟子入りした当時、芸能記者が毎日のように師匠の家に出入りしていました。

ある日、その記者が新入りの鶴瓶に対して非常に無礼で横柄な態度をとったのです。

それを見ていた笑福亭松鶴師匠が鶴瓶のいる前でその芸能記者を怒鳴り、「もう、うちには出入りするな!」と言ったという話があります。

ここで肝心なのはその理由です。「鶴瓶は今こそペイペイだ、しかしこいつは将来大物になる、将来を見抜けないどころかそのような横柄な態度を私の弟子にとるとは、おまえは何様だ」ということでした。

おそらくその記者は「新入りの弟子=どうしても良い、重要なのは師匠」と言う判断であったのでしょう。

人間ってね、今はどうであれ将来どんな大物になるか判りません。

大物になったとき、見抜けなかったその人は一つの仕事を確実に失うことでしょうね。

外見・老若・男女・国籍・経験・タイトルを見て判断するのではなく、その人の本質を正確に把握して判断したいものです。

見抜く自信が無ければ、どんな人に対しても謙虚に接すればいいのです。

そして、人を見るときは今の状態ではなく、心の奥に在るものを読み未来の姿を思い描けるかどうか肝要ですね。



50 c c のバイクはアクセル全開でも法定速度は関係ないとして 70km/h 出るか出ないかです。

方や 750cc のバイクならトップギアを使うまでもなく余裕で 100km/h 以上出せてしまいます。

速度だけなら確かに 750cc の方が能力が上です、しかし市街地などでは信号が有るし横断歩道もある、更には速度制限などで速度能力より燃費や小回りなど扱いやすさで 50cc のバイクの方が断然有利です。

これはあくまでも例えの話ですが、実際人間に置き換えてみても人は様々な能力や性格など、いわゆる個性と言うものがあります。

この個性に合った仕事に従事する事が出来たのなら、本人も採用した側もハッピーな状況となるのではないのでしょうか。

ある芸能人の実姉がパートから上場企業の社長に就任した話が以前話題になりましたが、自分に向いていた仕事に従事し、人一倍の頑張りも手伝って能力発揮出来た結果ですね。

しかし反面、個性はその本人が正確に把握するのは非常に難しいものです。

何故ならそこには自分への「思い入れ」や「思い込み」などのフィルター情報が入ってしまうからです。

そうです、自分の「好きな色」と「似合う色」は違うのです。

ビジネスでも同じ事で、「自分のやりたい仕事」と「自分に相応しい仕事」は殆どの場合違うのです。

だから自分のやりたい仕事に従事出来たのにも関わらず、「こんな筈では」と悩む事になりかねないのです。

自分の事は自分で思う以上に知らないものです。冷静に第3者の意見を聞く、出来るだけ多くの人から聞く、それを基に自分をまず正確に知る事です。

そして本当に自分に合った仕事、業務に従事できれば不満も解消し、ストレスも無く成果も出るものと思います。

まずは、自分に対する「思い入れ」、「思い込み」を払拭することです。



山ネズミは高速道路脇の剥き出しになったケーブル類を時々かじるそうです。

そのために信号トラブルを起こし、その修理費用は年間では大きな額になるそうです。

それが電源ケーブルなどであると当然のこと山ネズミは感電します。

そして怖い思いをした山ネズミは二度とケーブルをかじらないそうです。

これが本来の動物の防衛本能とも言うべき「学習効果」です。

対して人間はというと本当に何度痛い思いをしても懲りない動物らしい。

どんなに痛い思いをしても、もう一度その痛さを味わいたいという人もいるくらいで困ったものです。

ビジネスでも同じミスを不思議なくらい連発する人が居ます。何度言っても1回は直りますが翌日には元に戻っています。

いったいこれはどういう心理なのだろうか？

昔から、一度身に着いた癖は何度注意しても治らないと言われ、注意するとしばらくは治るのですが、そのうちまた復活してしまうようです。

人間は本当に懲りない、学習しない唯一の動物なのです。

ここには、人間の心理的作用が関与しているのです。

例えば、「怖かったけど、もう一度あの経験してみたい」、「怒られたけど、今度は怒られないかもしれない」などです。

人間とは思考する動物、その思考能力が優れているが故に時々不可解な行動を行うことがあるのです。

痛い思いをしたら、興味本位で妙な考えを起こすのでなく、やはり二度としないように強く心掛けることが肝要ですね。

同じ轍を何度も繰り返す踏む人には、成長はないのですから……。



ズバリ、人生において自分で選んだ方法や道が正解かどうかなんて誰にも判りません。

例えばビジネス。

人事、営業戦略、経営方針など、企業には多くの決定すべき項目があります。

最終的には最高責任者である経営者が決定する事になります、しかしそれが正解かどうかはその時点でははっきり言って誰にも判りません。

例えばプライベート。

進学、就職、結婚と「人生の岐路」と言うべき多くの選択すべき時があります。

その時、どれかを選択するわけですが、選択された方法や道が正解か否かなんてこれも誰にも判りません。

では正解とは何でしょうか？

それは選んだ方法や道が後に自分でも周囲にも「あの選択は正解だった」という結果を残すことです。

正解の本質とは、あくまでも結果なのです。

決して決断した方法や過程ではありません。

つまり、一度選んだらその後は一切悩まないことだ。

そして誰からも「正解だった」と言われるように悔いを残さずにやるべき事をやって結果を残すこと、それが尊い事なのです。



「話は最後まで聞くものだ」……、これは良く聞く言葉です。

「話は最後まで聞く」……、確かにマナー的にも重要ですが、それ以上に日本語という言語そのものの持つ特異性が余計にそうさせているのかも知れません。

日本語と言うのは使いようでは非常に便利な言語でもあります。

例えば、「私はこれに関しては賛成……」と言うところで相手の顔色などを見ながら話の最後の最後で「……です」とか「……しません」など決定する事ができるのです。

これはビジネス上では非常に有効な言語であるとも言えます。

英語などでは最初に肯定、否定が判ってしまうので最後まで聞くまでも無く判断できてしまいます。

ところが上記のように日本語の場合、最後まで聞かないと最も重要なポイントが判りません。

従って途中で話の腰を折ってしまうと、特に日本語では相手が本当に言いたいことが判らず、つまり本心を聞く機会さえ失ってしまうのです。


また人によっては「私はこれについては反対です……、しかし今回だけは状況を考えて賛成します」という微妙な遠まわしな言い方をする場合もあります。

これが日本人特有の文化かもしれませんが、この場合など途中で「何ですか!？」と言ってしまうと相手は同調しているにも関わらず敵対視し

ているように感じ、「じゃ、もう良いよ」と折角賛成と考えていても感情的に反対に回る事すらあります。

日本語では、相手の本心や会話の根幹を聞きたいと思うなら、最後まで話を聞くに限ります。

更に、正確な情報を得るという目的に照らし合わせてみても、話の途中で意見を言ってしまうと、相手の本心が聞けないばかりか情報そのものが曖昧になってしまうのです。



その15 しなくてもよい経験 はしない方がよい

経験は多いほうが良いとよく言われます。

確かに少ないより多いほうが良いと私も思います。それは問題解決などに必ず経験が生きてくるからです。

しかし、人生における時間には限りがあります。

仕事をする期間は通常の人で40年程度です、限りある期間であれば経験の内容も重要なファクターとなるのです。

私は「した方がよい経験と、しなくてもよい経験」とが有ると思います、何でも経験すれば後で生きるとは限りません。

しなくてもよい経験とはしなくても済む経験の事であり、失敗事例とかそういう問題ではありません。

例えば、私はずっと技術畑を歩いてきました、しかし経営者でもあります。経営者であれば当然最低限必要な知識や能力があります。私はこれらを設立前に独学で勉強してきました。結果多くの時間も費やしてしまいました。

しかし、会社を設立後、実際に会計処理や税務処理は顧問会計士や税理士が行ってくれるので私の出番はありません。最終的な確認だけで済むのです。

と言う事は最終的な確認に必要な知識だけを身に付ければ良かったわけです。

当時私はまだ20代、事後の事まで頭が回らず、「会社を作る = 必要な知

識と能力を付ける必要が有る」ということだけで行動してしまったようです。

ただ「今思うと」と言う事ですが、先に正確な情報を得てさえいれば他にもっと必要なカテゴリーに時間を費やせたな、と反省しきりです。

経験は多いほうが良いがしなくて済む経験はしない方が良いでしょう。